

平和と自由の両立は可能か

ノーマン・トーマス

(米国社会党党首)

今回の『権力に真理を語れ』なる声明は、戦争に対する宗教的平和主義の立場を述べた最良のものであるとわたしは考えている。同声明の執筆者およびその立場を信奉する人びとは、祖国および人間性への奉仕者であるといえよう。わたしはそのパンフレットを読んで、一種の精神的なノスタルジアを感じさせられたものである。というわけは、かく申すわたし自身も、かつて第一次世界大戦の戦中・戦後において同じ主義を信奉したことがあるからである。

しかしながら、現在のわたしは、「平和のための建設的な計画」を「軍事的防衛計画と同時的」に実行すべきではないとするとのそのパンフレットの基本的な主張に同調することができない。なぜなら、そうしなければ、第三次世界大戦の勃発が招来されるおそれがあるからである。そうなれば、戦争への反対がまったくの暴力と残虐をもたらす、さらに地上の人間生活および文明のすべてを破壊し去ってしまうというような皮肉な結果を招来することになるわけである。

パンフレットの執筆者たちが戦争の悲惨さを強調し、戦争に代わるべき非暴力方式の妥当性を論じていることは事実である。だが、かれらはまた、それを現在の情勢下で政治に適用することが不可能であることをみとめており、つぎのようにいつている。

「民主的な国家においては、まず第一に国民の大多数が自己の価値判断を規程をかえないかぎり、国家の価値判断の規程をかえることは絶対に不可能である。現段階においては、合衆国政府がこのパンフ

レットの主張する革命的な平和方式を實踐することは不可能である。なぜなら、まずそれに賛同すべき米国民の支持が十分でないからである」と。しかしながら、米政府がとくに、ここ数年の間たてつづけに第三次世界大戦の防止に全力を傾倒しないかぎり、われわれは敗北をまぬがれない。いかにその平和方式が崇高なものであり、将来において実践の可能性があるとしても（これに対するわたしの条件はさておき）、その信念を信奉する少数者が戦争を回避するように政府を説得しうるか否かは疑問とするに足る。これは、世界的な軍備の撤廃が実現しないかぎり、不可能である。

その分析の最後において、クエーカー派の人びとは、このような情勢の下で直面する絶望をば、かれらの基本的な宗教的確信である「永遠不変の政治」に関する神の命令にたよることによって、逃避せんとしている。かれらは、「戦争の手段に訴えることを否定する立場の根本をなすものは、究極的な知覚、すなわち、歴史とは無関係な信念、である」と信じている。

わたしも、かつてはこの信念を信奉していた。それを信奉することは、わたしにとつてはさほどにむずかしいことではなかった。というわけは、そのころ（第一次大戦当時）のわたしは——いまそのことを回顧すると——米国は戦争に代わるべき政治的な方式をとりうるということを確信することができたからである。具体的には、米国をして戦争の局外に立たしめ、平和交渉にのり出させることであつた。それ

にもかかわらず、当時のわたしの信念は、けつして政治的なものではなかった。だが、その後においてわたしは、「歴史とは無関係」な信念というものの存在を歴史的に裏づけることが不可能だということを発見した。もし人間がみずから、その人数の如何にかかわらず、戦争というおそろべき暴力を否定すれば、神はその結果を「永遠不変の政治」のなかにあらわしたもうということを歴史的に立証することが不可能だということに気がついたのである。人間の歴史には、昔から危機に直面した善良な人たちが、力づくで正義と自由を防衛ないしは獲得するために、同志たちと必死の覚悟で協力し合ったという例が数かぎりなく示されている。人間には、これ以外の方法はない。

理想をいえば、かのドレイ解放も、おそろしい内乱〔南北戦争〕に訴えることなしに実現されるに越したことはなかった。ところで、北部のドレイ廃止論者や連 主義者が、神の意志に万事をまかせるという確固たる宗教的信念を主張することのみでドレイ廃止を実現しえたか否か。もしかれらが、一八六一年から六五年にいたる間に積極的リンカーンを支持することに失敗していたならば、かれらも宗教的信念を主張することを余儀なくされたであろうことが考えられる。だが、もしこのような事態になっていたと想像すれば、強力な政治的方式を適用させる余地はなくなり、ドレイの廃止は実現しなかったはずである。

われわれが歴史を回顧した場合に、いろいろな事件について絶対的な判断をくだすことは不可能である。だが、現在のわたしは（一九三五年当時はそうでなかった）、もし英・仏両国が武力を行使して、かのヒトラーの強力なドイツ再軍備とライン地方への進駐を阻止していたならば、ナチスの侵略行為を防止し、ひいては第二次世界大戦を未然にふせぐことができたであろうと確信している。さらにわたしは、トルーマン大統領が国連と協力して朝鮮における共産主義者の侵略に対抗する手段を講じたおかげで、第三次世界大戦をもたらず可能性の多い共産主義的帝国主義の前進が阻止されたであろうと考える。

わたしは、軍事力によってソ連勢力を「封じ込め」ようとするわれわれの努力は、全面的な失敗ないしは平和実現のための建設的な努力を水泡に帰するような結果を招来しているとするパンフレットの執筆者の意見に賛成できない。仮に過去においてそのような努力がなされず、マーシャル計画〔ヨーロッパ経済復興援助計画〕もなかったとすれば、とつくの昔に軍事的共産主義は全ヨーロッパを席捲し、今日ではそれ以上の征服に着手しているはずである。現在ソ連をして平和に関心をもたしめている主な理由はなにか。それは、原子戦争の危険性についての認識と、そのために要するべく大な軍備費のためである、とわたしは考える。

平和はけつして全面的な降服によって保証されるものではない、とわたしは確信する。この点は、パンフレットの執筆者たちもそう考えているのではないかと想像する。一たび世界的な共産主義的帝国主義へ屈服して平和が達成されたならば、つぎにはわれわれの主人たる共産主義者同志の権力争いのための一回ないしは一連のおそろしい戦争の勃発が必要である。たとえ米国人が国内で非暴力的抵抗をころみようとしたりしたところで、それは米国内だけのことであって、それはベルリンはおろか、西欧、ひいては全世界の自由の夢がまったく消し飛んでからの話にすぎないわけである。

わたしは平和主義の存在価値をみとめはするが、われわれのこの不可解にしておそろべき世界においては、正義や自由、さらに永続的な平和を前進させるというようなことは、とうてい非暴力を絶対視しているような人びとにはできない相談であると考え。インドにおいてかのガンジーが輝かしき成果をおさめた非暴力的抵抗なるものは、かれの直面していた特殊な情勢に対する対応策であって、その事実を無視してそれに普遍的な絶対性をみとめるがごときことは言語道断である。これに反して、ワルシャワのユダヤ人たちは、かれらがおかれていた情勢の下で、あえて暴力的抵抗をころみ、結果においては武力的に鎮圧させられてしまった。だが、かれらの行動は、自由を求める

人びとの永遠のお手本となっている。

では、非暴力主義への過信は、一体なにに原因しているのでしょうか。それは、共産主義（共産主義者ではない）がいかに真理や自由や平和の敵であるかということを正当にみとめようとしない執筆者たちの怠慢さに由来している、とわたしは考えざるをえない。われわれは、民主主義を信奉しているとはいっても、しばしば民主主義の理念に行きづまり、たびたびそれに違反するようなことをやりがちである。われわれは、いまだに、防衛的な軍備をふくむいろいろな行為をとおして、レーニンの共産主義のごとくに、独裁権力に屈服し、警察国家に服従するような美徳を発揮する段階には達しておらない。

わたしは、現在、スターリンの死によって、共産主義の行動が急速に緩和しはじめているのではないかと考えている。だが、われわれは、このことに多くの期待をかけすぎることは危険である。

もしソ連が競争的共存をもって双方の共倒れに代わるべき唯一の方途であるという確信をもつにいたれば、そのときには、世界的規模における適当な軍縮方式に賛成するであろう。すなわち、抗争の焦点を原子戦争より思想的・政治的・経済的な面に移行させるわけである。

米国にも多くの欠点があるとはいえ、従来この確信にもとづいて軍勢力を抑制してきた点はみとめるべきである。だが共産主義者たちは、一国だけの軍備撤廃は降服にほかならぬと考えるであろう。永い間における共産主義者たちの態度の変遷から考えて、わたしはあえてこのことを断言してはばからない次第である。

さて、そこでわれわれは、心理的・経済的・政治的な諸要素がわれわれの防衛的軍事体制におよぼす悪影響を防ぐ対策を講じなければならぬ。われわれは、平和のためのより積極的な計画をもつべきである。民主主義の意義とその潜在的な強さというものを、もっと理解すべきである。暴力に代わるべき強力な方式を見出すために、より一層の努力をなすべきである。われわれは、ぼう大な軍備と軍隊を存続させることによって巨利をえている有力な派閥が推進する軍縮反対運動

と対決しなければならない。これらの利益集団は、軍縮反対運動を展開しないまでも、あらゆる角度から軍縮を阻止せんと努力することは確実である。われわれは、水爆のある世界よりも、軍備のない世界に自由の栄光が輝くという真理を、一層固く信ずべきである。

にもかかわらず、今日の米国政府および国民がおかれている政治の枠内においては、米国が軍勢力にもとづいて行動しないかぎりには、おそるべき世界戦争の危険性が増大する一方である。われわれは、いま政治的に考えられているような一国だけの軍備の撤廃によって平和と自由を獲得することは不可能だということを知るべきである。いかに原子力の時代であるとはいえ、自由のともなわないような平和なら死んだ方がましである。このような軍備の撤廃は、弱々しくかつ絶望的である。世界的な規模における軍備の撤廃のみが正当である。

とにかく、クエーカー派のメッセージは、われわれの良心に訴える何物かをもっている。だがそれは、われわれにある種の具体的な政策をみとめさせるほどではない。第三次世界大戦を回避して自由のともなつた恒久的な平和を確立せんことを切望している人びとは、軍勢力の見地に立つて世界的な軍縮管理協定の締結されんことを念願している。今日の段階においては、われわれはまずこのことに努力すべきである。